

生まれたり死んでしまったりのその日のはざま
生まれたり死んでしまったりのその日のはざま
・・・

河は今日も気持ち良く背骨をのばすよ

(友部正人『夕暮れ』から)

50年がかりの新作『大好き ～奈緒ちゃんとお母さんの50年～』が、やっと出来上がった。

それも、完成上映会の二日前に最終の録音作業を終えてゼーゼー息を弾ませながらゴールに駆け込んだような塩梅だ。

よく「伊勢さんは粘り強く時間をかけてドキュメンタリー映画を創りますねえ…」と感心されるけど、実は何事もスローモードで優柔不断な性格が成せる技で、ただただ仕事が遅いだけなんだ…。本当は、完成させたくない、という思いが強いのかもかもしれない。

本格的にスタッフを組んで撮影を始めたのが、1983年の正月だから42年前…それに遡って主人公の奈緒ちゃんが生まれたばかりの頃に写真も何枚か撮っていたし、奈緒ちゃんのことを生まれてからズツと気がかりだったから50年の記録…50年の記憶というくくりにした。仕事が遅いだけじゃなく、ずっと見守り続けて来たというのも嘘ではない。

「奈緒ちゃんが『人生まだまだ』とお母さんお父さんをたくさん生かそうとしているように見えて、涙が止まりませんでした。とても切ない深い映画でした。」

「初めから最後まで笑えるシーンがたっぷり飽きることなく楽しく見ることができました。そして最後にはジーンときて涙が出るという最高の映画でした！」

「信子さんの『何度も奈緒と一緒に死のうと思った』『奈緒に成長させてもらった』という言葉が残っています。」

「映像の美しさはもちろん、要所要所に入るピアノ曲、水の音、鳥のさえずり等も鮮烈に感じました。お母さんの、プーちゃんの代弁も！すてきですね」

「信子さんの『ずっと見ているよ』という言葉、そして、50年見てきた伊勢さん、映像スタッフの方たちの眼差し、さらには、月の視線というのか、もっとずっと遠くの方から、そそがれている眼差しのようなものを、最後受け取りました。まさに映画だなあ…」

「奈緒ちゃんだけでなく家族の側面から50年の記録が撮られていて、とても良かったです。

重い内容ですが、暗くなく前向きに描かれていて見る側にも勇気と優しさが伝わりました」

東京・日比谷と奈緒ちゃんの地元 横浜・泉区で行われた完成上映会の反応は上々です。ホッとしてます。今は、創って良かったなあ…という気持ちで一杯です。50年の間に関わった人々みんなに「ありがとう」を言いたい思いです。

で、5月の下旬に映画『大好き』を一番に観せたかった「えんとこ」の主人公、学生時代の友人、遠藤滋の命日に『えんとこ』『えんとこの歌』の作品に合わせて、『大好き』を上映しようと思っています。遠藤が観たら、どんな風に受け止めてくれるかを知りたいから…。

遠藤だけでなく、もう旅立ってしまい、今はいないスタッフの一人ひとり、友人、知人の一人ひとりにも観てもらいたいと思ってます。

私は、今生きている人々にだけかけて映画を創っているのではなく、今はいない旅立ってしまった人々に向けて、さらに言えば、これから生まれ出て生きる一人に向けて、映画を創っているとも思いたい。

「記憶」とは過去のことだけでなく、今のこと、未来に向けての時間を言うのだ、と思うから…

50年の記憶をぜひ観てもらいたい…

「大好き」の記憶、「いのち」の記憶。